

(平  
三十一  
文後)

# 小論文

- ・問題は1～12ページである。
- ・下書き用紙は中に2枚入っている。

注意 解答は答案用紙に縦書きで記入しなさい。

小論文 二〇〇点

(みすず書房 二〇一六年)

次の文章は、今福龍太『ヘンリー・ソロー 野生の学舎』の一節である(ただし、一部に変更と省略がある)。これを読んで、あとの問一～三に答えなさい。

自由に生きなさい、霧の子供よ——知識に関していえば、われわれはみな霧の子供なのだから。

——ソロー「歩く」

人が、生きるための思想を生みだす行動の根幹として「歩く」ことを選び取るとき、そこには、同じ道を歩きつづけた先人たちの存在への想像力がかならずはたらいている。なぜなら、人が歩けば、山野にはかならず踏み跡が刻まれて残るからだ。歩くとは、この先人の歩行の軌跡を探査することにほかならない。どれほど向こう見ずな散歩であっても、すでに自然の上につけられている踏み跡を辿ることを完全に拒否するような散歩はかえって不自然である。ソローはもちろん、すっかり踏み固められてほとんど無意識の通行路となっているような道、すなわち「常識」と呼ばれるものに寄り添つて進むことを敢然と拒んだ。だが一方で、心ある先人によってかすかにつけられた野生の小径こみちを発見し、それを辿ることの重要性を、誰よりも深く理解していた。それがかばそい道であればあるほど、ソローの探究心はかきたてられた。先人の歩行＝思考の痕跡として残されたかすかな小径へと踏み込んで行くこと。消え去ろうとしているからこそ大切な智慧ちえを、そこにふたたび見出そうとする。ここから、彼の野生の学舎のすべての学びはじまるのだった。

その点で、一八五六年八月一二日の次のような日記の記述は、ソローの「歩行」なるもののもつとも深い真実を示していて心うたれるものがある。

ピーターの小道で矢尻をひとつ見つける。この踏み跡を歩きながら、これまでいつたい何度矢尻を拾つたことだろう。まるで昔インディアンが歩いた小道のようだ。いや、たぶんそうだったのだろう。森につけられた小道は、想像以上に古いものが多いのだ。私たちの社会のなかの黒人は、いまもこうした小道をよく利用する。彼らこそ、インディアンのたどつた足跡にいぢばん近いところにいるからである。

このような記述は、過去の人間の繊細な行動へとつながる由来を持つた特別の小道をかぎ分ける、野生の身体能力ともいうべき感覚をソローが持っていたことを私たちに教える。ソローは、その研ぎ澄まされた感覚によって先人たちのかほそい踏み跡を発見し、インディアンのつけた思索の足跡をたどりながら矢尻と出会い、それによつてインディアンが森のなかにかすかに残した智慧を、新たな知性の発露のために受け継ごうとした。だがその道は、インディアンという先住の種族だけに帰せられる過去の道ではなかつた。ソローが鋭く直観するように、こうしたかほそい踏み跡をいまひつそりと通過するのは黒人たちである。黒人たちの、白人による差別的社会の「公道」にたいする距離感、疎外感こそが、彼らをしてこうした隠された踏み跡、すなわちひとつ創造的な「抜け道」を発見させる動機となるのだ。ソローは、過去の抵抗の歴史を宿した矢尻が無数に埋まつてゐるこの踏み跡が、被差別者としての歴史的な運命の共通性を直観する黒人たちの想像力によつて、あらたに発見されていることに気づく。インディアンの武器である矢尻と、黒人たちの奴隸制に対する抵抗の心が、この踏み跡において交差していることを誰よりも深く理解する。奴隸制に抗する黒人たちの思想の槍先に、象徴的な意味で、インディアンの矢尻がとりつけられていることを確信する。

踏み跡の示す教えは、それが動物によつてつけられた道の場合でも変わらない。森や野原に刻まれた獸道を、ソローはいつも探し求めて歩いた。動物たちが選び取る小径もまた、過去の時間を生きてきた親たちの生への本能的な理解と、それに繋がろうとする動物的な理性にもとづいてゐる。とりわけマサチューセッツの冬が地面を雪で覆うとき、人間だけでなく動物たちの歩行の痕跡が、見事に足跡として雪上に刻まれる。それは野生の知性そのものの連绵たる繋がりを可視的に示す、暗号のようなしるしもある。ソローは、コンコードに雪解けの兆候があらわれた一八五五年二月一八日の日記で、こう示唆的に書いてゐる。

雪解けがはじまる、雪上の通奏低音<sup>パツ</sup><sub>アルト・レリーヴオ</sub>のように見えた古い踏み跡は、浮き彫りにされた文字や彫刻へと変わる。足によつて踏みつけられた雪は、おそらく日光と雨の助けも借りて固くなり、最後までなかなか解けないからだ。そこだけ雪の塊が地面から突き出し、突端がいつまでも解けずに残つてゐる。踏み跡が、突起した氷の文字列のようなものになるのだ。この道は驚くほど長いあいだ、解けることに抵抗してゐる。自然はなんとこれらの文字に愛着を感じてゐることだろう。スカンクのような小動物の踏み跡でさえ、雪解けの時期を過ぎても長いあいだ残つてゐることが多い。

早春の雪解けの季節が見せるコンコードの山野の風景の変化を綴つた何気ない自然観察のようにも読めるこうした文面は、しかし、踏み跡というものの哲学的な意味を示唆してゐるとも読める。雪上に刻まれた踏み跡が、氷の塊として、あたりの雪が消え去つたのちも最後まで残り、「歩く」ことの、もつとも簡潔な意味を語つてゐること。ソローはここで、小動物の踏み跡ですら、そのような秘跡の文字を刻むことができるという事実を発見する。結局、ある道を選んで「歩く」ことは、動物を含めた自然界に生きたすべての先人たちの踏み跡をみずから見出し、そこに描かれた思索の痕跡を辿りなおす行為にほかならないのである。

\*

「歩く」と。それはすなわち人類の歴史における思考の軌跡のなかで、ある一つの道を選び取ることを意味する。そしてソローにとつて、それは「知識」への道ではなく、「知性」への道につながつていた。ソローは多くの文章のなかで、意識的に、「知識」knowledge と「知性」intelligence という二つの語を峻別<sup>しゆべつ</sup>して使用してゐる。そしていうまでもなく、ソローにとつて重要なのは「知性」のほうであつた。

遺稿となつたエッセイ「歩く」のなかで、ソローは一八二八年にボストンで設立された「実用知識普及協会」なる団体を皮肉つていふ。「実用知識普及協会」とは、この時期のアメリカ保守主義政治の代表である弁論に長けた政治家ダニエル・ウェブスターによつ

て創設された団体である。それは、労働者や中産階級の市民に、実用的な出版物をつうじて知識や教養を提供し、市民の社会的貢献を引き出そうとする政策の一環だった。実用知識 useful knowledge。だがまさに「役に立つ」知識とは、往々にして社会の実利的な目的に供される、すでに恣意的な変形をこなしたるものだった。ソローは、この実利的で「役に立つ」知識と言われるものの化けの皮をはがそうとする。「役に立つ」といわれる知識が、しばしばいかに凡庸で体制順応的な実利性にのみ奉仕するものであるかを批判する。知識があることを鼻にかける者ほど、「知らない」とが生みだす謙虚な自覚と探究心を失っている。だからこそソローがなれば皮肉を込めて宣揚するのは、むしろ「実用的無知」useful ignorance の方である。「なにも知らないということを知っている人間」の美德を、ソローは逆説的に称揚し、その先にこそ「知性」への道が拓けていることを説こうとする。

だからソローの言う「知性」とは、およそ短絡的な実用や効用性とは無縁の、とても厳格なものだった。しかもそれは、誰から与えられて獲得されるというよりは、みずから「共振」<sup>シンバン</sup>する対象としてソローには意識されていた。知性の存在を証明するのには、それがモノ<sup>II</sup>情報ではなく、ある種の神秘的な運動、あるいは靈氣<sup>スピリット</sup>のような不可視の現象として私たちにはたらきかけてくるときの、強烈な存在感によるものだった。ソローはその存在感を「霧」という気象現象になぞらえながら、こう印象的に述べている。

知識にたいする私の欲求は断続的にしか生じないが、私がまだ踏み込んだことのない大気のなかにすっぽりと頭を浸してみたいといふ欲求は、一年中、片時も消えることはない。私たちが到達できる最高知とは「知識」ではなく「知性との共振」である。単なる知識を超えた、この高度の叡知は、以前われわれが「知識」と呼んでいたすべてのものの不完全さに突然目を覚まされたときの、新しい大きな驚き、すなわち天地のあいだには人間の哲学などでは思いもつかないものが存在する、という発見にほかならないのだ。それはちょうど、霧の存在が太陽によって照らし出されるさまに似ている。人間はこれ以上高度な意味で「知る」ことはできない。ましてや、目を痛めることなく平然と太陽を見つめる」となどまったく不可能なのだ。

ここでは、西歐的な思惟の本質にある「光＝啓蒙」という比喩が、ソローラの批判意識によつて相対化されている。太陽という知識（光）の本源をじかに見たいという人間の欲望こそが知の伝統を生みだしてきたと教える歴史を、ソローはここで覆してみせる。人間のもつとも高度な欲求は、知識そのものの獲得にあるのではない。眞の知とは霧に隠されているものであり、それを求めようとして生成する「知性」の運動に自らを共振＝共鳴させることこそ重要なのである。それはまさに、「霧」という、真理を隠しているものを正しく認知し、それを見つめることによって達成される。いいかえれば、霧＝（謎／未知）の存在をそのままに照らし出すこそこそが、知性の光の究極の使命であるとソローは考えているのである。ソローにとつて霧とは、毎朝早晩になるとウォールデンの森や湖をおおい尽くすもつとも親しい気象現象であるとともに、より高い知性の運動そのものを示してくれる、唯一無二の象徴なのでもあつた。

先の文章につづいて、ソローはさらこう書いている。

みずから従うための法則を求めてしまう人間の習慣には、どこか卑屈なところがある。われわれはいつだつて自分の都合に応じて物事の法則を考慮してもかまわないが、法則を知つていれば人生がうまくゆくわけではない。束縛されているなどとは思つてもみなかつたところで、自分が法則に縛られているのを発見するのは、なんと不幸なことだろうか。自由に生きなさい、霧の子供よ——知識に關していくえば、われわれはみな霧の子供なのだから。生きるための自由を選ぶ者は、立法者からも自立しているおかげで、天と地の双方の法則の外部にいる。

人間がつくり出す法は、いわば既存の知識の帰結である。知識という実利的な価値への度を過ぎた依存は、結果として法や規則による画一的な支配を無意識にうみだす。だが法という見かけの絶対的真理の強圧的な光をさえぎり、私たちの「無知」を自覚めさせてくれる霧こそが、人間の思考の最後の自由を保証しているのではないか。私たちは、そのような意味で、霧をみずからの知性の根拠にすえ、霧の子供たる自覚を持つべきなのだとソローは主張するのである。

ここでやや唐突にでてくる「霧の子供」という語には、出典がある。それは、ソローも愛読していた一九世紀初頭のスコットランドのロマン主義作家ウォルター・スコットの歴史物語のなかの一つである『モントローズ綺譚』(一八一九)に登場する。サクソン人によつて領地を追い立てられた一六世紀スコットランドの種族の一つマッキーは、「霧の子」という名で知られている強者たちだつた。支配者によつて迫害を受け、森のなかにこもつて抵抗しながら古来の撻おさを守りつづけようとするこの野生の種族の古老ラナルドが、死のまぎわ、彼の後継者と見込んだ孫ケネスにこう語りかける場面が『モントローズ綺譚』の終盤にある。

さあ、行け！ わが愛する息子の最愛の子よ。（……）わしの最後の頼みを聞け。わたしたち種族の運命を忘れるな。霧の子たちの昔からのしきたりを捨てるな。わたしたちは、あらゆる氏族クランの剣ですべての谷から追い払われ、はぐれ迷うひとにぎりの仲間だ。あいつらがいま支配している土地では、かつてわたしたちの先祖が木を伐り水を汲んでいたのだ。しかし荒野の茂みのか、山の霧のなかで、ケネスよ、わしがおまえに生得の権利として遺す自由を汚さずに保て。ぜいたくな服、石の屋根、料理の並んだ食卓、羽毛のベッドとひきかえに、自由を手放したりするな。岩の上であろうと谷の中であろうと、豊かでいようと飢えていようと、木の茂る夏も厳しい冬も、霧の子よ、おまえの先祖とおなじように自由であれ。主人をもたず、法に従わず、人を雇わず、賃金を払わず、家を建てず、牧場をつくらず、種も播まかず、山の鹿をおまえの羊、牛、馬とせよ。

シェイクスピアとならんとソローが深く心酔していたスコットの物語のなかにこんな一節を見つけたとき、ソローはきっと静かに興奮したのではないだろうか。主人も持たず、法にも従わず、組織からも家からも耕作からも自由になつた野生の種族。サクソン人によつて土地を追われたという運命は、アメリカ大陸のインディアンの同じ歴史をもまちがいなくソローに連想させたであろう。ソローはハーヴィード大学在学中の一八歳のとき、すでにスコットの評伝についての短い書評的エッセイを書いているほど、このスコットランドの作家に強い関心を抱いていた。スコットが現実にはスコットランドの最高民事裁判所の書記官をつとめた司法官でありながら、地方の民話や叙事詩、バラッドを精力的に収集し、そうした民俗世界にみなぎる反規範的な想像力をみずか

らの物語のエネルギーに取りこんだ軌跡を、ソローはおそらく自分に重ね合わせて読みとろうとしていたのであろう。霧の子供、という言葉は、真の知性に向けての自由な道のありかを探し求める若きソローの思索を、このとき発火させた。

「霧の子供たち」。この喚起的な表現はたしかにスコットの物語に一つの起源を持つていた。だが、「歩く」においてことさら出典を示すことなく使用されたこの表現は、ソロー独自の思索のなかすでに新しい意味を与えられていたといえよう。知識という外形をまとつて存在するあらゆる法則や制度を相対化し、それらの明証性を、知性の謎めいた運動である揮發性の「霧」のただなかで問いかげり直し、深く吟味してみること。そんな豊かな霧のなかから真の知性が芽生えるのであれば、人間はみな霧の子供である。いや霧の子供でなければならない。この霧こそが、人間を人間たらしめる母胎であり親なのだから。ソローが、「歩く」の最初の手稿において「霧の子供」＝“child of the mist”と小文字で書いていたものを、のちの校正の段階で “Child of the Mist” と大文字に書き換えていることも、その意味では見過ごすことのできない事実かもしれない。ソローは「霧の子供」という言葉に、ある種の固有性をもたせようとした。それは、公の社会が大文字で書きつける制度的な固有名詞に抵抗する、彼の野生の学舎における例外的な大文字の言葉として、ソローにとつての人間の未来像を照らし出していた。

\*

霧は、いうまでもなく自然現象として、ウォールデンの湖の辺に簡素な居を構えたソローが最初に発見した、特別の、もつとも親しい隣人だつた。『ウォールデン』の「どこに住んだか、何のために住んだか」の章で、ソローはウォールデン湖を毎日眺めて暮らす生活の始まりを描きながら、なによりもまず、湖の周囲に毎朝のように訪れる霧の風景について言及している。

陽が昇るにつれて、湖が夜のあいだに身にまとつていた霧の衣を脱ぎ捨てると、あちこちに、かすかなさざ波か、ときには光を照り返すなめらかな水面がしだいに姿をあらわしはじめた。一方、霧は夜陰にまぎれての秘密集会を終えた幽靈のように

こつそりと四方に散つてゆき、森のなかへと吸いこまれていった。だが霧の残した露は、山腹に見られるように、ふつうよりも長く、日中になるまで木々にとりついているようだつた。

湖面を覆う朝霧。昼の湖に垂れ込める雲。夜の霧雨や驟雨。<sup>しゅうう</sup>冬の氷や雪。湖じたいが水の塊というだけでなく、ウォールデンの自然はソローにさまざまな形態をつうじて現れる「水の遍在」の印象を強く刻み込んだ。とりわけ霧のまとわりつく森や山野が、茫茫と揺らめきながらその姿を刻々と変容させてゆく様は、大地じたいが、水と蒸気のはたらきによつてたえず揺れているのだ、という実感をソローに植えつけていく。ソローはこの浮遊感のことを、「付近に水があると、それが大地に浮力を与え、浮き上がらせるので、こちらまで浮き浮きしてしまう。どんな小さな井戸でも、なかをのぞきこむ者に、大地は大陸でなくて島であること教えてくれる」と興味深く書きつけている。大地なるものもまた、究極的には、水に浮かぶ島にほかならないという直観。それは、大地を占有し開拓し濫用しながら社会制度をつくりあげてきた近代人の土地への思いこみを本質的に問い直し、大地という存在をもついには水の流動的な理法のなかに解き放とうとするソロー独自の思想を述べたものにほかならない。

ソローはどこかで、人間が堅固な大地につなぎ止められた存在であることから解放される自由を追い求めていたような気がする。日記や著作のさまざまな場面に登場する、水の揺らぎへの関心や、空中へと飛び立つことへの憧れなどは、その証拠である。霧という現象も、ソローにとつては、この浮遊感にもどづく存在へのまなざしを支え、ものを見るための新たな視点を示唆するものとしてたえず描かれている。コンコード川リマスケタキッドの川霧もまた、そのようなものとして意識された。

霧がたちこめると舵取りには高度な技術が求められるので、早朝の川旅はより興味深いものとなる。そんなとき、川は限りなく広くなつたよう見える。物のかたちがかろうじて分かる程度の細かい靄があたりをおおうときは、不思議な幻覚作用によつて、ふつうの川でさえも海の入江や内陸の湖にまつすぐ繋がつているように感じられるのだ。このときの靄は気持ちよく爽快で、私たちはそれを、朝日の兆し、あるいは露を含んだ光の萌芽<sup>ぼうが</sup>として享受した。

ここでソローが言うように、霧は、現実の風景をまつたく異なった基準で理解するための不思議な視線を人間に与えてくれる。あたりまえのように固定化されていた日常の風景が細かな水滴の集合体によつて覆い隠され、その神秘的なレンズの作用によつて、川の存在が不思議なことに海をも連想させるようになる。ふだん意識されない、川と海の深い結びつきを、霧が教えてくれるのだ。霧を、これから育つてゆく光の萌芽、光の嬰兒<sup>えいじ</sup>のようなものとしてとらえるこのソローの視線は、不可知こそ知性が生まれる源泉であると論じた「歩く」のソローを、すでに先取りしている。

霧についてソローが描写した文章のなかで、もつとも壮大で、かつ哲学的な暗示を感じさせるものが、『コンコード川とメリマック川の一週間』に出てくる、夜明けのサドルバッ克山頂で見た荘厳とも言うべき霧と雲海の話である。そこでソローは、隠すことによつて逆に大地の生成原理をくつきりと教えてくれる霧という現象の神秘について、こう刺激的に語つている。

明るくなつてくるにつれて、広大な霧の海のなかにいることに気づいた。霧はちようどこの展望台の足元のところまで上がつてきてるので、大地の痕跡はすっかり隠されてしまった。私は、世界の難破船の破片の上に立つて雲海の波間に漂うようにな、ひとり取り残されていた(……)。東雲の空をゆつくりと染めてゆく曙光は、夜の眠りから私がそこに向かつて起き上がるうとした新しい世界、おそらくは私が将来生きてゆくことになるであろう新しい大地<sup>テラ・フィルマ</sup>の姿を、一層はつきりと見させてくれた。(……)眼下は見渡すかぎり、すべての方角に一〇〇マイルにわたつて波立つ雲海の国であり、自ら覆い隠している陸地の世界にたいし、雲はその表面の多様な起伏をもつて新たな自己主張を示していた。それは夢のなかに出てくるような、至福の喜びが感じられる楽園の地であつた。雪におおわれたように見える白い牧草地が無辺際に広がり、霞んだ山々のはざまには見るからに美しく刈り込まれて引き締まつた薄暗い谷間があつた。そしてはるかな地平線には、たつぱりと霧が立ちこめた豊かな森が大草原へと張り出しているのが見える。谷間の縁に生い茂る靄でかすんだ木々によつて、川の蛇行の跡をたどることもできる。思いがけないアマゾン川やオリノコ川の出現である。

霧と雲海の眺めによつて開示される「私が将来生きてゆくことになるであろう新しい大地の姿」。それをソローは、あらたな「テラ・フィルマ」*terra firma* と呼んだが、ラテン語で「堅固な大地」を示すこの表現は、通常の、地表における陸地の存在を海や空から峻別する概念から解放され、堅固な陸地というよりはむしろ霧と雲によつて示された柔軟で流動的な景観、それによつてむしろ大地を構成する深い真理がすつきりと示されるような、そんな景観を指す言葉として蘇つている。壮大な霧と雲海の広がりが、その揺らめく形状と起伏をつうじて、隠された大地の根本原理を簡潔にソローに教えたのだ。この揮發性の精妙な原理を呼びだす霧こそ、世界地図を平面的な束縛から解き放つことのできる新しい知性への手がかりである。ソローの昂揚する精神は、こうして霧につつまれたマサチューセッツ州の山上から、南米アマゾン川やオリノコ川の蛇行する熱帯雨林の景観を幻視するような奇想をうみだしてゆく。霧が、ソローに「世界」のあらゆる景観をつくりなす高次の法、いわば霧の理法を授けたのである。

霧はこうして、もつとも高次の隠された理法を示し、それに向けて意識を共振させてゆく知性のはたらきを促すものとして、ソローによつて特別の現象にして象徴となつた。自由な知性が、「霧の子供」である私たちのものであるのなら、その知性は分かりやすい透明なものであるはずもなく、一つの意味や解釈のなかに閉じてゆくような常識的理解を拒むものでなければならなかつた。『ウォールデン』の結びの章でソローは、分かりやすく安全で、囲い込まれた言葉によつて語るのではなく、多義的で曖昧で「度を越した」言葉によつて語ることの大切さを情熱的に説こうとする。ソローは言う。人間にとつての未来の可能性は、行動や思考の前途にたっぷりとしたゆとりをもたせ、限界や規則を設けず、未来の輪郭はつねにぼんやりとあいまいにしておくことのなかにある、と。知性の宣揚を、創造的な曖昧さの宣揚として語ろうとするソローは、『ウォールデン』という著作全体を総括するように、こう書いている。

私は自分の文章がまだ曖昧模糊の領域に達したとは思わない。だが、この点において、本書のページが、ウォールデン湖の氷とおなじような組成であり、それ以上の致命的な欠陥をもたないのであれば、私はそれをもつて誇りとすべきだろう。南部からやつてきた顧客たちは、ウォールデンの氷が青いのを——それは純粹である証拠なのに——濁つていると勘違いして嫌い、

白いけれども草の雑味がするケンブリッジの氷のほうを仕入れていった。人間が愛する純粹さとは地上を包み込む霧のような不明瞭なものである。彼方にある紺碧の空のようなものではないのだ。

ソローが考える真の純粹さとは、霧の姿のなかに潜んでいるような精妙な原理だつた。それはけつして混じり気のない透きとおつた「分かりやすい」存在ではなく、ウォールデン湖の冬冰が青く濁よどんで見えるのとおなじような状態において、純粹な真実を秘め隠していた。そしてその真理は霧のように揮發性をもつた脆弱ぜいじやくな真理でもあり、つかまえそこねればすぐに雲散霧消し、素晴らしいウォールデンの青冰を愛でる代わりに、ケンブリッジのフレッシュ湖の凡庸な氷を上等な氷であると勘違いしてしまうような結果を招くものでもあつた。

ここでソローは、いわば曖昧さや不透明さの側から真の純粹さなるものの姿をとらえようとしている。そして霧こそ、豊かな曖昧さの象徴として、その奥にある真の純粹性という価値を求める知性が発露する条件なのだつた。霧は本質を覆い隠す障害物であるどころか、未知を求めて知性の運動が立ち上がり、それが永遠にくり返されるための唯一無二の媒体であり、同時に叡知の本質にある「知ある無知」を示す本体なのでもあつた。

『ウォールデン』という著作は、ウォールデン湖の青冰の示す、霧のような深い純度を語ろうとした。だが、その言説や論理がみせる常識を逸脱した主張や文体は、いまだに「分かりやすさ」の基準によって留保をつけられ、無理解のなかで表層的に受けとめられている感がある。ソローは言つてゐる。私は新たな大地に向かつていま目覚めつつある人間であり、同じように目覚めつつある人間に向けて語りかけたいのだ、と。霧によつて輪郭を曖昧にされた森羅万象の示す、精妙な真理に向けていま目覚めようとする新しい人間。「霧の子供」の一人として、ソローは彼に続く無数の「霧の子供たち」に向けて呼びかけ、彼の信ずる「野生の学舎」への自發的な参加を促そうとしたのである。

問一 傍線部①に関して、「知識」と「知性」との違いを三〇〇字以内で説明しなさい。（配点四〇点）

問二 なぜ霧という自然現象が「ソローによつて特別の現象にして象徴となつた」（傍線部②）のか、四〇〇字以内で説明しなさい。  
（配点六〇点）

問三 学ぶとはどのような営みか、この文章の内容を踏まえ、あなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。（配点一〇〇点）